

東南アジア世界の形成

今回学ぶこと

東南アジアは、大量の雨と強い日ざしが豊かな物産を生み出す地域であっただけではなく、インドや中国という大文明の間に位置し、さらに陸と比べて格段に大きな輸送力をもつ船が行き交う空間でもあった。そのことから、古くから各地の商人が訪れ、交易の重要な拠点となっただけでなく、さまざまな文明が伝えられることになった。今回は、古代からヨーロッパの商業勢力が進出する以前の15世紀までの東南アジアの歴史の動きを学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- 東南アジアでは香辛料が特産物となっていたが、香辛料にはどのようなものがあり、どのような用途に使われているのか調べてみよう。
- 東南アジア各国で現在用いられている文字はどのような形をしており、どこから伝わったものか調べてみよう。
- 東南アジア各地で、父、母、息子、娘などの単語や、数字の1、2、3がどのように発音されるのか、調べてみよう。

多様で豊かな自然

東南アジアは、雨季と乾季の差がはっきりとしている熱帯モンスーン気候と一年を通して雨の多い熱帯雨林気候で覆われているだけでなく、高地と低地、海岸地域と内陸地域など極めて多様な自然環境の中にある。そうした条件は、一方では極めて人間が住みにくい環境を意味するが、他方では多様で豊かな植生をもたらすものである。

この地では、香辛料などの希少な産物が生み出され、胡椒はもちろん、モルッカ諸島でのみ生産されたクローブなどの香料が貴重な商品価値をもち、それらを求めて、アジア地域だけではなく遠くヨーロッパからも商人たちが訪れるほどであった。ベトナムのオケオ遺跡では、古代ローマからもたらされた金貨が発見され、同地が古代の交易拠点であったことを示しているが、そのことは東南アジアが古代から人々を強く引き付ける魅力のある産物生み出す地域であったことを意味する。

大文明の吸収

東南アジアは、西はインド文明やアラブ文明とつながるインド洋と、東は中国文明とつながる南シナ海の間位置する海域世界に位置する。そのため、古くから、大文明の間を結ぶ交通の要衝としてとして重要であり、さまざまな影響を受けてきた。

4世紀ごろから最も大きな影響を与えてきたのはインドであり、ヒンドゥー教、仏教などのインド起源の宗教や、ラーマーヤナなどの伝承や神話、経典、王権の考え方、サンスクリット文字などが東南アジア各地に伝えられた。

中国からも銅鏡が各地に伝えられるなどの影響が知られているが、その後も中国とのつながりは続き、13世紀後半にはこの地に拠点築こうとしてベトナムやインドネシア、ミャンマーなどに武力侵攻するため遠征軍が送られた。その試みが失敗して以降も、15世紀にはインド洋やメッカを目指した鄭和の大艦隊がマラッカを拠点とするなど、強い関係が見られた。15世紀のマラッカ王国の時代になると、インド経由で伝えられたイスラムが、マラッカを拠点として東南アジア各地に広まった。このように、東南アジア地域は、インド、中国、西アジアなどの大文明を次々と吸収してきた。

独自の文化形成

伝えられたさまざまな文明要素も、そのままの形で東南アジアに吸収されたわけではない。東南アジアには、数多くの巨大な宗教遺跡が残されているが、カンボジアのアンコールワットやインドネシアのボロブドゥールなど、インド文明の影響を深く受けつつも他に類例のない建築が生み出されたことを知ることができる。また、インド発祥のラーマーヤナに基づく物語やそれを題材にした影絵や舞踊などにも、東南アジア各地でそれぞれ独自の様式が生み出され、現在に伝えられている。

